

戦後70年報道の報告

岡本晃明

戦後50年、戦後60年、毎夏の8月15日。「風化」という言葉を何度使ってきただろう。「戦後〇〇年」と銘打った連載の取材を何度も担当してきた。しかし社会にその声が届いたかという、忸怩たるものがある。戦争を知る世代が老い、少なくなったことは事実だが、30年前も、20年以上前から何度も「風化させてはならない」という言葉は繰り返され、新鮮な言葉でなくなっていることは否定できない。8月だけ戦争や平和を報じる「8月ジャーナリズム」と嘆くことさえも、言い古されたものになっている。

戦後70年をどう伝えるか、という問いは、「新聞が戦争の何を報じずにきたか」を自省することと同義だと思った。新聞メディアの存在感が揺らぐ中で、取材の在り方と伝え方を両面で見つめ直したい。知らず知らずのうちに、新聞の流儀に染まって、切り捨てているものがあるのではないか。

京都新聞の戦後70年の長期連載企画「時を渡る舟」を企画する段階で手がかりになったのは、あるメロディーと会場の喝采だ。

以前、京都や滋賀からビルマ戦線に送られた兵たちが収容所で京都をしのぶ望郷の曲を作曲したことを知り、失われた楽譜を探して元兵士を訪ね歩き、連載「戦場の京都交響曲を探して」にまとめたことがある。元兵士たちは強制労働の間に英軍から盗んだ物品でバイオリンやギターを手作りしていた。連載に読者の反響が大きく、掲載を終えてから、発見された手作り楽器や楽譜の音を生で聞こうと2010年、元兵士たちと京都フィルハーモニーらに呼びかけて記者たちでコンサートを開催した。当時の指揮者、ギタリスト、女形だった90歳前後の元兵士たちが舞台上に上がり、喝采を浴びた。時を超えるメロディーの力と、語りの力があつた。満員の観衆の涙に、記事とは取材して書くだけではないのだと、もっと深く地域の社会に踏み込めば一緒にできることがあり、伝わる可能性がある、と気付かされた。それは東京発の大きな1本の歴史を編むことではなく、地方の戦後史、複数の歴史に光を当てることであり、「地方紙だからできること」への気づきでもあつた。

新聞の流儀や「型」から、少しはみ出してみること。2015年元旦から掲載をスタートした「時を渡る舟」では、戦争の歴史を掘り起こしながら、戦争の記憶や記録を次代に受け継ぐ難しさ、阻む現代の壁を訴えたことが特徴だ。戦後報道の再検討には、新聞が取材で「分かった」ことだけを残すのではなく、記憶や記録の継承をめぐる現在起きていることをルポし、読者と一緒に考えてもらおうと考えた。

「どこを書くか／書かないか」は、社会に広がるメディア不信と深く関係している。日本の新聞ジャーナリズムは「何々がわかった」というスタイルで書いてきた。あたかもジャーナリズムは情報をすべて掌握でき、そのうえで「〇〇がわかった」と書くことがスクープとされ、業

界内では評価軸になってきた。

一方、記者が日常的に積み重ねている「話すことはない。帰れ」と取材相手に言われたり、プライバシー保護の壁でとどり着けなかったりした体験は記事にしない習慣になっている。足で稼いだ記事も、あふれる官庁の広報資料から書かれた記事も、読者の目には違いが見えない。

しかし、特定秘密保護法ができたこともあり、そこは変えていかねばならない。報道側は「答えてもらえませんでした」「情報を得られませんでした」と書くのは負けだと思っていたけれども、これからの状況下では、そこも明らかにしていく必要がある。何が秘密にされ、何が公開を阻む壁となっているのかを可視化し、私たちメディアのある種の弱さも見せねばならないのではないか。

第1部「記憶のテクノロジー」では、確かなはずの「現代史」が技術面や社会の変化で劣化し、消えつつある現状を追った。記憶を継承するテクノロジーは、秘密保護法や行政文書の公開、監視技術、ビッグデータ、ネット上の個人情報が消去されない問題などとも重なる。昔撮影した運動会のビデオテープが劣化し、機器もなく再生できない。国会図書館所蔵のフロッピーディスクとCD-ROMのうち7割も対応ソフトがないなどの理由で再生できない。8ミリ、ガリ版…。つい10数年前の記憶が消えつつある。昭和という時代が足元から崩れていくような漠とした不安。訴訟記録でさえ保管スペースの都合で廃棄され、「青焼き」などの謄写文書は感光し、劣化していく。記者が遺族と、収蔵庫に眠る歴史資料を再会させるドキュメントを試みた。何十年も前に亡くなった母の声を資料館で眠っていたオープンリールで聞き、高齢女性が涙した。

3月下旬から掲載した第2部「追憶廃棄社会」では、愚直に新聞が切り捨ててきたものに近くことにした。戦後70年を取材する中で「古い」と個人の追憶を取り巻く現代社会の過酷さに遭遇することがある。戦争の思い出を語りたいという手紙の主を訪ねると、老老介護や認知症の暮らしに出合う。在宅しているのに応答しない高齢世帯。戦後を歩んだ家族の思い出の品々もあるかもしれないのに「ごみ屋敷」とされ、施設入所を機に多くを廃棄せざるをえない現実。思い出の品や家とともに老いを迎えることを社会の壁が難しくしている。戦争の記憶を伝えたい認知症の人、ごみ屋敷の住人らに粘り強く取材し、「語り継ぐ」ことの大切さを叫びながら、研究者や社会が真に耳を傾けてきたか、老いとともに思い出の品を廃棄させる社会になぜなっているのかを問い直した。

他人からは「ごみ」「無駄」「病」だと見えるモノや語りの堆積の中に埋もれた戦後の歩み。ごみを片付けるといった福祉的アプローチが「引き算」とすれば、ジャーナリズムの調査力で戦争や戦後の思い出を「足し算」していくことで何が見えるのか。個人情報の壁、福祉関係者がその専門性ゆえに周囲の人が関わることへの壁になっている現実、高齢者向け施設の一人当たり面積基準なども記事化した。同じ話を繰り返す人の元に通い、5時間、6時間の話を何度も何度も聞き、対話を探った。「今あったこともすぐ忘れてしまう」と家族や周囲に思われていた認知症のおじいさんが、記者が発掘した米軍大津キャンプの資料を示して英語で話しかけると、流ちょうに英語で話し出す奇跡的な出来事もあった。

第3部「ピース？」は、街角のブリクラを訪れる人全員に声をかけ、家族の戦争の記憶と写真撮影時のピースサインという身ぶりに何を込めているのかをインタビューするドキュメンタリーだ。社会風俗に溶け込んだピースサインを手がかりに、ベ平連・宗教者平和運動・フォー

クムーブメントなどで重要な磁場だった京都の歴史をたどりつつ、その変容を明らかにした。取材班は、祖父が被爆者で、広島・長崎の地図を入れ墨にしている若者にも出逢った。

第4部「越境する言葉と人」は、戦争と戦後をめぐる言葉に焦点をあて、「中国残留孤児」「ヘイトスピーチ」「ヒバクシャ」といった言葉を、日本語を母語としない人はどう受け止め、言葉に刻まれた戦後の政治性や歴史観の違いをどう乗り越えることができるのか探った。

京都新聞ホームページに「戦後70年」コーナーを設け、連載「時を渡る舟」に加え、紙面では紹介しきれなかった映像資料、戦争体験者の音声やサイドストーリーを公開している。記憶や資料の廃棄を迫る現代社会の壁を示し、記者が人と人、人とモノをつなぐため右往左往する姿をさらすこと。地方紙のささやかな試みだ。「戦後80年」の節目になってから、「10年前にもっと聞いておけばよかった、棄てなければよかったのに」と悔やまないために。

